

師範代物語

9

福島支部

夏井正泰／滝嶋邦彦／吉田広明

東北地区最大の規模を誇る福島支部。三瓶啓二師範が道場を開設したのは第12回全日本で師範が初優勝した直後のこと。すでに30年以上もの年月が流れた。今回は長きにわたり三瓶師範の協力者として道場に貢献した故・夏井正泰師範代、分支部長として新極真空手の普及に努める滝嶋邦彦師範代、本部道場を支える吉田広明師範代を紹介する。

Text / 神田勲 Photos / 神田勲、滝嶋邦彦師範代



◀ 三瓶師範の両腕、滝嶋邦彦師範代と吉田広明師範代。長年にわたり三瓶道場を支えてきた功労者である故・夏井正泰師範代の遺影とともに

三瓶啓二師範率いる福島支部には現在、二名の師範代がいる。だがこの記事の取材を三瓶師範にお願いした時、師範から「もう一人の師範代も紹介して欲しい」との申し出があった。一昨年の6月25日に亡くなった夏井正泰師範代だ。

夏井師範代は城西大学空手部で極真空手を始め、初期の全日本大会にも出場経験があり、空手歴は三瓶師範よりも長く、三瓶師範の先輩にあたる。大学卒業後は故郷の福島で数人に指導していたが、第12回全日本大会の後、大会で優勝した三瓶師範が福島で道場を開設すると、師範代と黒帯会会長を務め、道場の発展に貢献した。

夏井師範代は頭突きが得意で、大山倍達総裁の命を受け、ヨルダン皇太子の前で試割りの演武を行なったこともある。現在、三瓶道場の師範代に名を連ねる滝嶋邦彦師範代と吉田広明師範代も下積み時代は夏井師範代の手ほどきを受けた。ご冥福をお祈りしたい。

滝嶋師範代が空手を始めたのは大学入学と同時期。「空手バカ一代」を読んで、大学入学以前から極真空手をやりたいと思っていたが、ある日、スポーツ用品店に貼ってあった道場のポスターを見たことがきっかけとなった。テレビで極真の第12回全日本大会の中継も見たことがあり、三瓶師範の名前も知っていた。だが全日本チャンピオンから直接指導してもらえなかった。入門当日、

たまたま三瓶師範が他の道場に指導に行っていたことも滝嶋師範代にそう思わせる一因となった。

当時の三瓶道場は、まだ常設道場はなく、福島体育館を借りて稽古をしていた。滝嶋師範代が入門して間もない頃の話だが、ある日、稽古開始時間にはちよつと早いと思われる時間に体育館に着いた。誰もいないだろうと思つて中を見ると三瓶師範が黙々と柔軟をやっていた。テレビで見た三瓶師範には怖いイメージがあり、滝嶋師範代は中に入るのを躊躇していた。するとそれを見た三瓶師範が「中に入つていいぞ」と声をかけてくれた。誰でも白帯当時はこんな経験があるだろうが、白帯時代の滝嶋師範代も何をどうしたらよいかかわからず、中に入つて着替えたものの、緊張したままその場にたずんだ。やがて三瓶師範は一人で体育館内を走り出した。滝嶋師

あった道場のポスターを見たことがきっかけとなった。テレビで極真の第12回全日本大会の中継も見たことがあり、三瓶師範の名前も知っていた。だが全日本チャンピオンから直接指導してもらえなかった。入門当日、たまたま三瓶師範が他の道場に指導に行っていたことも滝嶋師範代にそう思わせる一因となった。

範代は（先生が走っておられるのに白帯の自分がぼーっと立っているわけにはいかない！）と思いき、師範と同じように、しかし遠慮がちに距離を置いて走った。

また、滝嶋師範代が茶帯から黒帯への昇段審査の時、こんなこともあった。滝嶋師範代の10人組手の対戦相手に三瓶師範代が「10人組手というのは一生に一度しかない。だから対戦相手は絶対に手加減をせず、半殺しにするつもりでかかれ。そうでなければ本人のためにならないからだ！」と、檄を飛ばしていた。審査を受ける本人の目の前で「半殺しにするつもりでかかれ」とはすごい話だが、それを聞いた滝嶋師範代は（やるしかない……）と覚悟を決めたという。

また、こんなエピソードもある。三瓶師範代が全日本大会に出場した時のこと。セコンドで付き添っていた滝嶋師範代に三瓶師範代はウォーミングアップのために自分の胸を叩かせた。滝嶋師範代は必死で叩くが三瓶師範代には一向に効かない。そのうち叩いている滝嶋師範代のほうが疲れてしまった。この時、滝嶋師範代は全日本王者の実力を肌で感じ取った。



▲ 昨年の3月に行なわれた追悼稽古にて



▲ 三瓶師範と寮生たち。滝嶋師範代らの青春時代



▶ 飛び蹴りをする修行時代の夏井師範代



Profile

吉田広明
よしだ・ひろあき
福島支部
師範代 参段
1966年8月20日生まれ



Profile

滝嶋邦彦
たきしま・くにひこ
福島支部
師範代・白河分支部長 参段
1963年1月23日生まれ



Profile

夏井正泰
なつ井・まさひろ
福島支部
師範代・黒帯会会長 初段
2012年6月25日没
(享年62歳)

三瓶道場のもう一人の師範代。吉田広明師範代が空手を始めたのは高校生の時。友だちに誘われて地元の富岡町で他流派の空手をやっていたが18歳の時、三瓶道場の分支部に移籍。その後、20歳で福島市役所に就職すると同時に三瓶道場の本部道場に移籍。21歳の頃にはさらなる強さを求め、本部の寮生になった。道場の近くに寮から仕事に通い、空手の修行に没頭した。

「三瓶道場のもう一人の師範代。いないんですよ」と苦笑する。いつの間にか道場の名札が「師範代」というところにかかっていた。二人ともその時期をよく思い出せないのだそうだ。そのことについて吉田師範代は「自分たちへの先生なりのお気づかいではないかと思えます」と語る。一生懸命やっていた弟子をさりげなく気遣う——三瓶師範代の人柄がうかがえるエピソードだ。

また滝嶋師範代は「師範代として重責を担っているという感覚はありません。先生は自分で動かされる方なので、それをお手伝いするという感覚です」と語る。大会の準備などでも三瓶師範代は自ら真つ先に行動し、それを師範代が手伝うというスタイルなのだそうだ。

三瓶師範代に師範代を任命するポイントを聞いたところ「私と一般の生徒との通訳をしてもらうことです。今は空手の武道性を追求して教えていますが、私の言うことは色帯クラスには伝わりにくいのですから」とのこと。『三瓶理論』の理解者として、師範の理論をかみくだいて後進に伝えることが三瓶道場師範代としての務めなのかもしれない。